

市川團十郎 ういろう賣のせりふ

（原典に基づく旧字旧仮名遣い）

拙者親方と申すは。お立合の中に。御存のお方もござりませうが。お江戸を立て
 二十里上方。相州小田原。一しき町をおすぎなされて。青物町を登りへお出でな
 さるれば。欄干橋虎屋藤右衛門。只今は剃髪いたして。圓齋となのります。
 元朝より大晦日まで。御手に入まする此薬は。昔ちんの國の唐人。ういろうと
 いふ人。わが朝へ來り帝へ參内の折から。此薬を深く籠置。用ゆる時は一粒づゝ。
 冠のすき間より取出す。依て其名を帝より。透頂香と給はる。即文字にはい
 たゞきすぐ香と書てとうちんかうと申す。只今は此薬殊の外世上に弘り。ほ
 う／＼に似看板を出し。イヤおだはらの灰俵のさん俵の炭俵のと。いろ／＼
 に申せども。平がなをもつてういろうと致たは。親方ゑん齋ばかり。もしや
 お立合の内に。熱海か塔の沢へ湯治にお出なさるゝか。又は伊勢御參宮の折から
 は必ず。門ちがひいなされまするな御登ならば右の方。お下なれば左側八方か

ういろう賣のせりふ 市川團十郎



《このページの原典》

『花江都歌舞妓年代記（はなのえど かぶきねんだいき）』
 卷之一・初編二 烏亭焉馬 著、松高齋春亭 画
 天保 12 年・1841 年刊（国立国会図書館所蔵）

し。ゆんべもこぼして又こほした。たあ。ふぼゝたあ。ふぼゝちりから／＼つたつ
ぼ。たぼ／＼干だこ落たら煮てくを。にても焼いても喰れぬ物は五徳鐵きうかな
くま 熊どうじに石熊石持虎熊虎きす中にもとうじの羅生門には。茨木童子が。うで栗
五合つかんでおむしやるかの頬光のひざ元去す。鮒きんかん椎茸定めてごだん
なそば切そめん。うどんかぐどんなこ新發知小棚のこ下に小桶にこみそがこ有
ぞ。こ杓子こもつて。こすくてこよこせおつとかてんだ心得たんぼの川崎。かな
川程がや。とつかははしつて行ばやいとを摺むく三里ばかりかふち沢平塚大磯が
しや小磯の宿を七ツおきして早天さう／＼相州小田原とうちん香隠れこざらぬ
貴賤群衆の花のお江戸の花うゐらう。あれあの花を見てお心をおやわらぎやつと
いふ。産子這子に至るまで此うゐらうの御評判御ぞんじないとは申されまい／＼
つぶり角出せ棒だせぼう／＼まゆに。うす杵すりばちばち／＼ぐわら／＼／＼と。
はめを弛して今日御出の何茂様に。上ねば成ぬ賣ねばならぬと。息せい引ぱり
とうほうせかい とくすり もと 東方世界の薬の元め薬師如來も上覽あれと。ホゝ敬て。うゐらうはいらつ
しやりませぬか。

- この当時の文書には句読点は使われず、原典に書かれている「。」は、息継ぎのための区切り点と思われます。ここでは、句点、読点の区別をせずに原典に沿つて「。」のみを表記しました。

- 一ページ本文六行目の『透頂香』は、原典では『頂透香』と表記されていますが、これは誤記ではないかと思われるため、ここでは、正しい表記の『透頂香』としました。

「菊栗、むぎごみ」の下りは、菊栗の「六」と、むぎごみの「三」が欠落しているのではないかと思われますが、ここでは原典のままの表記としました。

「誰長長刀ぞ」の下りは、「誰長長刀ぞ」であると思われますが、ここでは原典のままの表記としました。

『花江都歌舞妓年代記』(はなのえど かぶきねんだいき) 卷之一

鳥亭焉馬(うていいえんば)著 天保十二年・1841年刊(国立国会図書館所蔵)

・享保三年・1718年に關する記述

享保三戊年 正月一日より 森田座

『若緑勢曾我(わかみどりいきおいそが)』

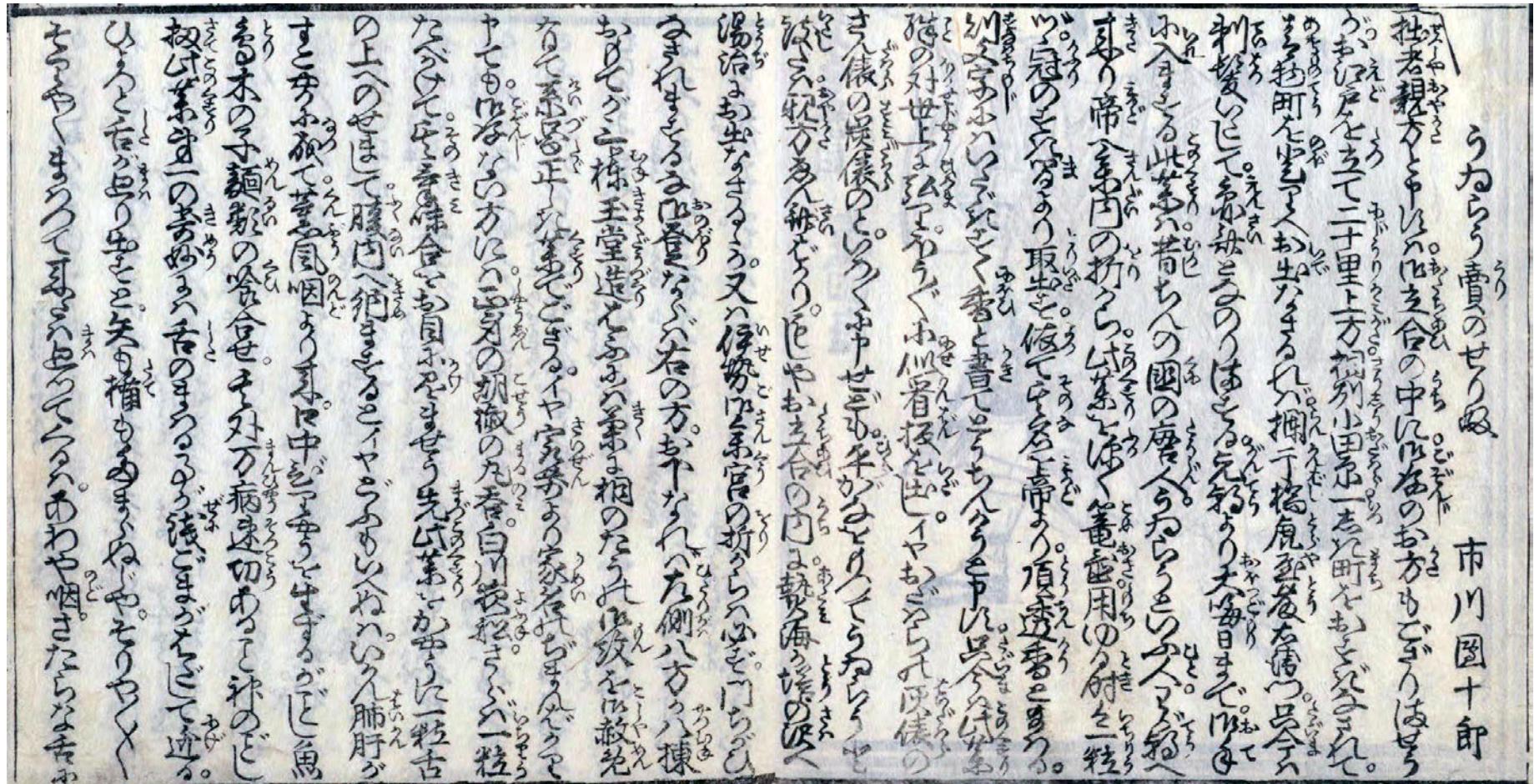
團十郎 ういろいろ売のせりふ。自作にて弁舌瀧のとし。

大評判 大入り。これを始めとして、代々、家の芸となる。



二代目市川團十郎ハ。その比山中平九郎。山中平四郎。敵役。市川六之助。國十郎。翁子となり。市川源四郎と改名。其年。上上の位。享保十一年春。上上士ト。藤倉長九郎と。夫人同位。夫主。出世。宣保三年。看月。生十郎。森田座へ行願見世。奉納。天地人筒守。のせりふ。國十郎。足二度目のあづまくはて。篠塚五郎。定獨。大輔。大入り。太福院。太福院のせりふ。享保三年正月二日より森田座。若緑勢曾我。國十郎。うならう賣のとりぬ。自作。矢吉瀬のとじ。大評判。大入り。足を始にして。代々家の芸と。する。次へふも。市川座。嵐喜代。二追善。まゆぐる。二株勘太郎。お七。勘九郎。在代。後。め此丸よ。封多。を付す。此せりふ。又大入り。般昌。を。依て。呈。よう。封多。ハ。お七。の役所と。大津。うちに。足を付す。されば。嵐喜代。と。至。岡山。勘九郎。を。中興の祖とする。うて。○。付。み。同。寛文六年。四代目市川竹之助。九五。戈。そ。手。提。の。門。よ。入。れ。せ。る。

・「若緑勢曾我（わかみどりいきおいそが）・ういろう売りのせりふ」（1／3）



*このページの、本文七行目の「頂透香(とうちんこう)」は、「透頂香」の誤記ではないかと思われるため、文字起こしでは「透頂香」としました。

初演俳優：二代目市川團十郎 初演年：享保3年・1718年 初演劇場：江戸・森田座 原題名：若緑勢曾我（わかみどりいきおいそが）

*このページの、後ろから十行目の「菊栗、むぎごみ」の下りは、菊栗の「六」とむぎごみの「三」が欠落しているのではないかと思われますが、文字起こしでは、原典のままの表記としました。

*このページの、後ろから九行目の「長長刀(なかなぎ)」は、「長長刀(なかなぎなた)」ではないかと思われますが、文字起こしでは、原典のままの表記としました。

・「若緑勢曾我（わかみどりいきおいそが）・ういろう売りのせりふ」（3／3）

こみそうとまどと枚子こすりと。ことくとことせあらとがをと
ゆるなわの川邊。かす川裡がや。うとうとつて行をゆひとが橋
ひく、重ぞううち次平塚大城。じや小城の宿をせつぢて
早天まく相列小田原をまちん香邊れあまくわせせせせの
君のあはてのをうわらう。向の君をよそあひをちへまゐる
いふ春よ這ふ幸るまくせらからむれ西洋御門をくわらひ
まれまくはくさり角を棒せがくまゆ。うそ杵ぞうち
をもくさりはくと。をもく地て今日ひ生の你善後。よ上ねば成
ね麦穂。あらぬと。良せひ。う東方世界のせの元大善
あらね。すうえ。お散てうわらうへひらひまくせぬ。

『ういろう売』 初演俳優：二代目市川團十郎 初演年：享保 3 年・1718 年 初演劇場：江戸・森田座 原題名：若緑勢曾我（わかみどりいきおいそが）

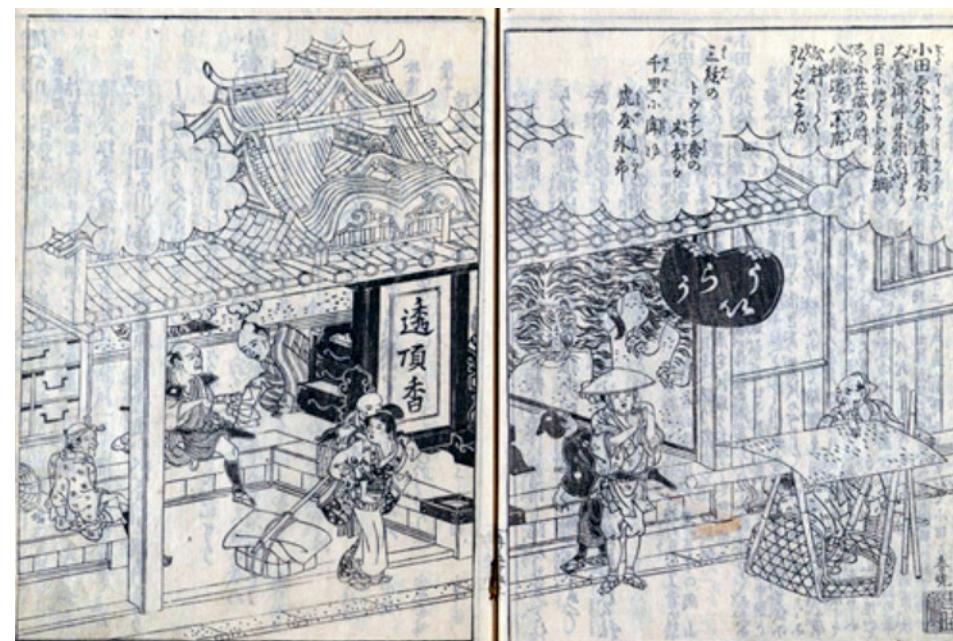


名取春仙画
『似顔畫集-創作版畫[2] 第十五』
外郎賣 市川三升
大正 14 年-昭和 2 年・1925-1927 年
(国立国会図書館所蔵)

「外郎売・ういろううり」は、享保 3 年・1718 年正月二日から、二代目市川團十郎によつて江戸・森田座で上演された『若緑勢曾我（わかみどりいきおいそが）』の中の台詞。

團十郎の自作で、『弁舌瀧のごとし。大評判で大入り』であつたとされ、これ以降、成田屋の家の代々の芸となり、歌舞伎十八番（かぶきじゅうはちばん）の演目の一つとなつた。

歌舞伎十八番は、成田屋の家の芸の集大成で、七代目團十郎が「市川流」の「歌舞妓狂言組十八番」の制定を公表したのは、天保 3 年・1832 年三月の市村座。



『東海道名所圖會』 寛政 9 年・1797 年 (国立国会図書館所蔵)



豊国画
『歌舞伎十八番 外郎』
「虎屋東吉 九世市川團十郎」
嘉永 5 年・1852 年
(国立国会図書館所蔵)